

# のら 動場 現場 運

## 東京からドレスデンへ

―広場の群衆と街並みのなかに空襲の記憶を読む

山本 唯人

いま、2月16日から4月7日まで開催する、「空襲を伝えるドイツの都市―ドレスデン・ベルリン・ハンブルク」展を準備している。この展覧会の企画・制作を主に担当しているのは、東京大空襲の被害者・原爆被害者の方々と、年一回、浅草ウオークを開催してきた市民団体の和・ピースリング。主催・場所は、江東区の東京大空襲・戦災資料センターである。3月8日から、ドレスデン空襲の証言記録に携わってきた「1945年2月13日」協会代表のマティアス・ノイツナーさんが来日する。3月13日は、大阪市中央会館ホールで13時30分から、16日は戦災資料センターで14時から、センターでは館長の早乙女勝元さんも発言者に加わり、講演会を開催する。

見つめてきた証人でもある。ノイツナーさんは、1960年生まれ、設立以来のメンバーで、壁崩壊後、空襲死者数などを検証するドレスデン市の歴史家委員会にも参加した。ノイツナーさんがもたらす情報は、ナチスの体験世代・戦後世代の共同ではじまった市民運動が、旧東ドイツの社会で空襲体験をどのように捉え、現在に至ったかを、まとめたかたちでは初めて語るものとなるだろう。わたしたちは、東アジアとヨーロッパの現代史を背景におきながら、空襲の記憶について語り合えることを心待ちにし、その環境を整えることに全力をあげている。

人と外国人を排除しない、すべての戦争被害者に開かれた戦後補償を実現することが、浅草ウオークの主な目的である。2006年には、日本軍の爆撃で被害を受けた重慶の被害者からも訴訟が起こされた。これをきっかけに、日本と中国の空襲被害者に交流が始まり、重慶原告団が来日する際、墨田区押上の東京大空襲訴訟原告団事務所を訪ねるのが慣わしとなっている。

和・ピースリングは、こうした活動を、「非当事者」の立場から支援し、戦争被害者とともに、浅草路上のウオークをつくりあげてきた。2005年、六本木ヒルズで開催された「東京大空襲展」(東京大空襲六十年の会主催)に参加したボランティアを中心に、アフガニスタン・イラク反戦を担った世代、戦争体験世代、ベトナム反戦世代など、多様な世代の人びとがメンバーとなった。

筆者



「1945年2月13日」とは、ドレスデンが大空襲で灰燼に帰した日付。同協会は、証言の収集を旧東ドイツ時代の1980年代に開始し、壁崩壊を経て、「ネオナチ」が台頭する新自由主義時代まで、ドレスデンの現代史を

この交流の淵源は、2006年、東京浅草の路上から、「差別なき戦後補償」を求めてはじまった、浅草ウオークの活動にある。2007年、原告100人規模で日本政府に謝罪と補償を求める東京大空襲訴訟が提訴された。2003年からは、被爆者からも全国的な原爆症認定集団訴訟が提起されていた。このふたつの原告団を結びつけ、日本の戦後補償に埋め込まれた「軍籍」(軍人・軍属であるか否か)と「国籍」(日本国籍者であるか否か)というふたつの差別条項を撤廃し、民間

2011年2月、ドレスデンで、ドレスデン空襲と東京大空襲体験者の肖像写真を集めた、ポール・サヴィアーノさん(ニューヨーク在住の写真家)の展覧会「From Above」が開かれた。その様子を取材した、研究者の柳原伸洋さん(現東海大講師)をゲストに、同年3月11日の東日本大震災当日、浅草公会堂でイベントを開催した。柳原さんがもたらしたメッセージ映像には、日本の空襲体験者・市民への親愛、平和のために行動していくことへの呼びかけが込められていた。このメッセージに心を動かされたわたした

ちは、2012年2月、東京・大阪の空襲被害者や市民に呼びかけ、ギリシア危機でヨーロッパ中が震撼させられるなか、柳原さんと阪大准教授の木戸衛一さんの協力を得て、ドイツの被災都市・ドレスデン・ベルリン・ハンブルクを訪れた。今回の展覧会は、この旅の成果を中心に紹介するものである。

それでは、わたしたちの目を、ドレスデンに引き付けるものはいったい何か。そこには、ドレスデンの人びとが行動を通してつくりだしてきた街並み、広場につどい、自分たちの意思を表明するたくさんの人びとの姿がある。ドレスデンでは、2005年、空襲で破壊された

ままになつていた聖母教会が、60年の時を経て再建された。再建は、歴史的建造物に囲まれた旧市街の「ノイマルクト広場」の再開発と一体であり、その背後に、都

市間競争に生き残りかけた観光開発の論理が垣間見える。一方、市民サイドからは、歴史の継承という観点から再建への反対があり、焼け残った瓦礫を、黒ずんだ色のまま元の場所にはめ込み、空襲遺構のモニュメントを残すことで、「継承」への意思を示した。

また、教会最上部の鐘はイギリス軍爆撃パイロットの息子によって製造され、砂岩製の外壁はポーランドのグステイン市から贈られたものである（柳原伸洋「ドイツの空襲展示―統一後のドレスデン市を中心に」2009年）。こうしたプロセスを重ねることによって、聖母教会の再建は、「過去の栄光」に向かうのではなく、戦後ドイツが積み重ねてきた、加害への贖罪という文脈を踏まえて、「和解」という新しい関係を創造する方向へ向かっていったのだ。

2月13日、ドレスデンでは、毎年聖母教会を中心に、空襲で焼かれた旧市街を1万人以上の人びとが取り囲む「人間の鎖」というイベントが開かれる。鎖はシナゴークの脇を抜け、エルベ川を渡り、再びノイマルクト広場に戻って円弧を描く。その中心には、空襲で失われたいのちをあらわすろうそくが灯され、人びとは死者たちに思いをはせる。同時に、この鎖は、近年、ドレスデンを「聖地」として巡礼するネオナチから、教会再建の精神を守るゲートであり、群衆のなかには、鉤十字反対のロゴ入りTシャツを着る若者、老人、子ども連れの親子など、真の意味で多様

な老若男女の姿が見える。昨年2月、わたしたちは、エルベ川対岸へ向かう鎖の一部になり、広場につどい群衆のひとりになった。この場に立った時、湧き上がってくる透明な感情、炎のゆらめきを包む優しい気持ち、ネオナチに若者を引き込む旧東ドイツ地区経済の現状、さらにその基層にある、ドイツ最東部のザクセンに刻まれた歴史など―これらへのおもいが重層し、共有される（時間）の存在こそが、ドレスデンがたどりついた「現在」の核にあるものだろう。

それはまた、ち密に計算された開発的思考、人びとの文化的統合をはかる権力と分かちがたいものでもあるのだ。

わたしたちもまた、平和や戦争がもたらす惨禍をくりかえし語ってきた。しかし、平和やいのちを毀損する暴力が、そもそもどのような場で語られるのか、どのような風景のなかで、どのような人びととのつながりのなかで、切実な意味を放つのかという点については、それほど突き詰められてこなかったのではない。ドレスデンの試みは、広場に集う足音のざわめき、存在を引き受ける器としての都市が持つ意味を、教えてくれているように思う。

（やまもと・ただひと／和・ピースリング／東京大空襲・震災資料センター）